

山口大学 平成11年度入学式 学長告辞  
平成11年4月8日 学長 広中平祐

新入生の皆さんに、まず第一に、ありがとうございますとお礼を申し上げます。この山口大学を選んで受験し、これまで学習と勉強に努力を続けられた成果が実って入学試験に合格し、そして入学してくださった皆さんに対し、私はこの大学の学長として、一人ひとりに心からの感謝を表明いたします。また、この入学式にご列席くださったご家族やご友人の方々が、今日まで、このように立派に成長した新入生を背後から支援し声援して山口大学に送り込んでくださったことに対し、学長である私からの感謝の念を表明いたします。

同時に、私は、貴君がこの山口大学を選んだ事は大変賢明な判断であったと思いますし、さらに、今日貴君が山口大学への入学許可を獲得したことは、貴君に人生にとって幸運の始まりだと確信しております。ご自身の幸運を感謝すべきだとさえ考えています。

今年の新入生は、  
人文学部 207名  
教育学部 251名  
経済学部 412名  
理学部 235名  
医学部 85名  
工学部 677名  
農学部 149名  
医療技術短期大学部 120名  
合計 2,136名  
であります。

皆さんは、厳しい試験や面接や選考をパスして見事に合格を果たした方々です。貴君の能力と意欲が認められて選ばれて入学できた方々です。私は、貴君の優れた素質と強い願望に賞賛の念を感じています。だからこそ、私は、貴君達がそれぞれ自分が持って生まれた資質をさらに大きく育て上げ発現して確実なものとして欲しいと強く念願する次第です。入学後の勉学こそが、今までの勉強以上に、否、比較にならないほど大きく、貴君の将来に永く重要な基盤を築く事でしょう。この山口大学での勉学で、貴君の隠れた力量に一層の磨きがかかって成長し、貴君が美しく生きる大いなる知恵を学びとって行かれるものと期待しています。

私は、山口大学に選ばれた貴君は大変にラッキーであると断言します。そして、私は、選ばれて山口大学長を務めさせていただいていることを大変な光栄に存じています。このように考える理由は大変多岐にわたっていて、一口で説

明できることではありませんが、まず第一に、山口大学をとりまく地域はユニークな自然に恵まれていることです。

内村鑑三の著書「地人論」の中に、地理は歴史の基盤であると説かれています。吉田松陰の文章にも、「地を離れて人はなく、人を離れて事なし、故に人事を論ぜんと欲すればまず地理を觀よ」と述べられています。このような考え方は、社会の流動化・国際化・情報化が著しく発展した現代では過去のものと考えられがちでした。しかし、再び、昔とは違った視点から、各地域独特の地理や風俗習慣に関する関心が高まっています。地域伝統の祭事や産物が話題性を増しています。また、自然と人間の問題がますますグローバル化すると同時に、ローカル独特の微妙な違いを知るニーズが発生しています。グローバルという造語が現代的な新語として流行する所以がそこにあると私は認識しています。

山口県は独特の地理を持っています。本州の西端にあって、南に瀬戸内海、北に日本海と性格の違った両海域に面し、六百七十キロにも及ぶ長い海岸線を持ち、しかも海岸から四十キロ以上隔たったところが県内にはほとんどない、という屈指の海岸県です。地勢は山がちで、至るところに小盆地、河岸の段丘、海岸の平地があります。中国山脈は、山口県が島根県や広島県と接する県境付近の標高千メートル前後の山々を持って終わり、山口県内部の山々はほとんどが低山です。しかし、県内の数百を数える山々は、それぞれ名前が付けられて山歩きを好む人々に親しまれています。先人の足跡を訪ねて意外な発見をしたり、遠い昔日の言い伝えを聞いて、それを自分の頭の中で自由に展開してドラマを創作しながら山を散策するのも楽しいものです。学生時代にそのユニークな地理をもエンジョイして欲しいと思います。

さらに、山口県は豊かな文化と教育の歴史を持っています。それを知って、学問することの意味をご自身で考えてみてください。

この地域は歴史的にもユニークです。先史時代から大陸、特に朝鮮半島との交流は始まっており、大和朝廷の四世紀後半になると、半島との交流はますます盛んとなったようです。十四世紀中頃には大内氏によって防長統一がなり、西の京都と呼称された山口を中心に、大内文化の二世紀にわたる繁栄が始まりました。さらに、十五世紀の初頭から海外貿易は中国の明の国へと発展しました。十六世紀の中頃には、山口にフランシスコ・ザビエルを迎え、他の地域に先駆けて西洋文化の受け入れに前向きだったことが知られています。大内文化の時代に続き、毛利権勢の下で文武育成の時代を経て、さらに、日本の国家形態そのものを革新した明治維新の発端から終結まで、過去数世紀にわたる日本の近代化と国際化の歴史において、この山口県を中心とした領域は国家的ドラマの主演を務めてきたと言っても過言ではないでしょう。

この山口大学も、そのルーツをたどって歴史を遡っていくと、その内容が実に豊富であることが納得できます。

中世の大内氏によって啓発された防長の文化と教育の奨励は、毛利氏に受け継がれて、文武育成の儒教を中心とした教育に蘭学をも加えて、さらに組織的に振興されました。萩の明倫館は、1718年に儒学教育を目指して萩城の中に創建され、以後も、毛利氏歴代の家督の肝煎りで改善と拡充を重ねて文教興隆に貢献しました。山口氏出身の上田鳳陽が、萩の明倫館で学んだ後山口に帰り、1815年に文学を教育することを祈願して山口講堂を設立したと伝えられています。山口講堂は、1845年に山口講習堂と改称され、文武の諸芸を総合するものに発展しました。

萩では、1840年に医学所が設けられ、東洋医学薬学のみならず蘭学と並行して西洋医学が奨励されるようになり、防長の医学研究は画期的な発展を遂げることとなったと言われています。浦和に米国軍艦が渡来したとのニュースに刺激されて、1855年には医学所から独立して西洋学所が設けられ、西洋の兵学とともに機械製造法に関する工学の研究が始められました。1860年、大村益次郎(当時村田蔵六)が登用されて、西洋兵学、特に砲術の研究を教授し、その補助学科として理学や数学の研究も指導しました。毛利藩庁が萩から山口へと移転した1863年には、山口講習堂は山口明倫館と改称されて防長文教の中核となりました。この山口明倫館が現在の山口大学の大きなルーツの一つです。

明倫館以外にも、それ以前からも、郷学、私塾、寺小屋が各地にあって、地方土民の教育に資するところは多かつたようで、「日本教育史資料」によると、山口県は、郷学の数では全国第一位、私塾は岡山、長野、東京について第四位、寺子屋は長野に次いで第二位を占めていたとのこと。これは、歴史的にみて、山口県の教育に対する関心が高かつたことを示すものと言えましょう。多くの私塾の中でも、明治維新夜明け前と言える十九世紀の中頃に開設された私塾、村田清風の尊聖堂(開設1845年)や吉田松陰の松下村塾(開設1855年)などはよく知られています。松下村塾の塾舎は現在も萩の松陰神社の中に残されています。うっかりすると見過ごしかねない掘建小屋、六畳二間の塾舎から、明治という新時代を切り開いた人材が多数輩出したという事実は、教育史上にも大変意味深いことと思います。

この山口大学を今日まで育ててくれた地理と歴史と先人達は、過去数世紀にわたって近代化・国際化を目指して躍進した日本の国家的なドラマの中で、実に顕著な役割を果たして来たと言えないでしょうか。偉大な歴史を持つ地域の知的精神的遺産を受け継いで、昭和24(1949)年に、幾多の強く長いルーツを併せ持った山口大学は、新しく国立の総合大学として出発しました。それから今年までのちょうど半世紀の間に、多数の先人達のたゆまぬ献身的な努力に

よって、山口大学は今日までに成長し創立50周年を迎えることとなりました。教育は100年の計と言いますが、いわば、正にその大計の中間点にいるわけで、私達は将来ますますの発展を念願して着々と準備を進めているところです。長期的展望に立って、単に量的な拡充の追及に終わらず、質の面で躍進する道を模索し、着実に前に進み続けることを貴君たちも期待してください。

また、2001年に「いのちきらめく」をテーマにした国際的な「未来博」を阿知須で開催すべく、山口県の産業界・学会・各種自治体の総てが協力して企画を進めています。それを成功裡に終わらせるためには、学生諸君の積極的な協力と参加が期待されています。諸君も我々の仲間として、一緒になって、山口大学が貴方の将来のために何が出来るか、大学が出来ること、出来ないことを明らかにしようではありませんか。さらに、もっともっと大切なことは、山口大学が貴方のために為すべきなのに出来ないことを、どうしたら出来るようになるのか、私たちと一緒に考えてみようではありませんか。

本日、山口大学に入学された諸君のこれからの学生生活が、多くの苦勞はあっても大きな希望に満ちており、地味であっても着実に知恵の成長と蓄積を見せてくれることを祈念して、告辞といたします。

平成11年4月8日 山口大学長 広中 平祐